降臨節第４主日　　ベートーヴェンから学ぶこと　　２０２１．１２．１９．

今日の福音書は、マリアさんが旅をして親戚のエリサベトのところに訪問した時の出来事を書いています。この出来事を教会は毎年５月３１日に記念することになっています。アメリカやイギリスの祈祷書では、３月２５日の聖マリヤへのみつげの日や８月１５日の主の母聖マリヤ日と同様に、５月３１日も大祝日にしています。しかし、なぜか日本聖公会は、聖書にハッキリ書かれている、この「おとめ聖マリヤの訪問」を小祝日にしてしまっています。聖書には出てこないマリアさんの逝去を記念した８月１５日さえ大祝日にして守っているなら、妊娠２か月余りで親戚のエリサベトを訪問したことも大祝日として、アメリカやイギリスに倣い、もっと大切にするべきではないか、と私はずっと思っています。

この訪問が大切なのは、この訪問の時、エリサベトの歓迎の言葉に対して、マリアさんが歌った「マリヤの賛歌」、昔の祈祷書では「聖なるおとめマリヤの頌」と呼ばれる歌ができたからです。今日の福音書としては省いてもいいことになっている箇所ですが、私はここにイエス様の誕生の意味が隠されていて、クリスマス直前にも、特に強調して読まれるべきだと思うのです。そのことについて、今日は話しますが、その前に、この「おとめ聖マリヤの訪問」という出来事を、マリアさんの立場で少し考えておきたいと思います。

教会の伝統から言えば、ナザレに住むマリアさんに天使ガブリエルがみつげを持ってきたのが３月２５日。そしてまる９か月過ぎた１２月２５日がイエス様の誕生ということになります。ユダヤでは、以前紹介したと思いますが、数え歌で９は妊婦の妊娠期間の月の数ということになっています。

それでエリサベトを訪問した時は妊娠２か月余りです。そしてマリヤの賛歌のあとにルカ１章５６節には『マリアは、３か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。』とあります。

教会はエリサベトの産む洗礼者ヨハネの誕生日を６月２４日にしていますから、マリアはエリサベトの出産１ヶ月ほど前にエルサレムの西にあるエンカレム（ぶどう園の泉という意味）に住むザカリアとエリサベトの家に来て、出産前後のエリサベトの身の回りの世話をしたのでしょう。そして訪問から３か月。８月下旬に自分の家に帰った、ということですが、それでは、マリアの帰った自分の家とはどこにあるのでしょうか？

普通に考えると、またナザレに帰り、人口調査のためにヨセフと一緒に出産直前にナザレから 100 キロ離れたベツレヘムまでロバに乗って旅をしたことになるでしょう。おそらく片道 3 日はかかる旅だったと思います。

しかし、私はこれについても、この 10 数年疑問に思っています。マリアさんがエリサベトを訪ねたことを記念して建てられた訪問教会は、エルサレムの西の方にあります。私はそこを１５年前に初めて訪ねました。また、エルサレム市内にはアンナの教会という、マリアさんのお母さんの住んでいた家と思われるあたりに立派な教会が建っています。そしてマリアとヨセフの夫婦が登録に行ったベツレヘムは、エルサレムから南に 8 キロほどの場所です。だから、マリアさんは、エリサベトの出産の手伝いをすることで、妊娠が目立たないままでナザレからエルサレムの郊外に移れたのでナザレには帰らなかった。

ナザレでは、周囲の人々から白い目で見られるのを避けるように、天使が親戚のエリサベトの妊娠 6 か月であることを理由にナザレから去らせた。そして、妊娠 5 ヶ月で目立つようになると、そのままエルサレムにある、アンナの家。マリアさんの実家の家に帰ったということではないか。『マリアは 3 か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。』とは、ナザレではなくエルサレムだったと思うのです。そして、クリスマス前にヨセフがナザレから来て、2 時間ほどで行けるベツレヘムまで登録のために出かけたと思うのです。それなら、周りの者も心配せずにベツレヘムまで行かせたと思います。

さて、それでは、マリヤの賛歌のほうに移りましょう。

この、革命的な歌を思い出してください。

◆マリアの賛歌

1:46 そこで、マリアは言った。
1:47 「わたしの魂は主をあがめ、／わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
1:48 身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も／わたしを幸いな者と言うでしょう、
1:49 力ある方が、／わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、
1:50 その憐れみは代々に限りなく、／主を畏れる者に及びます。
1:51 主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、
1:52 権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、
1:53 飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。
1:54 その僕イスラエルを受け入れて、／憐れみをお忘れになりません、
1:55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、／アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

身分の低い、この主のはしためにも、目を留めて、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。

これは、イエス様の誕生の意味を語っている箇所、父なる神様の御心を語っている箇所だと思います。

そしてこれは、ベツレヘムで羊の群れの番をしていた羊飼いに天使が言った「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」という言葉にもつながります。

世界のほんの一部、特権階級のためではなく、貧しい庶民のためにこそ、救い主が来たんだ、ということです。

日本では年末のこの時期、ベートーヴェンの第９交響曲合唱が最後にある有名な曲が演奏されます。

私は数年前ですが、『ベートーヴェンを聴けば世界史がわかる』文春新書の１１９１番という本をよんだことがあります。大変興味深い本でした。

この本で先ず学んだことは、音楽というのは、作曲家が勝手に音楽を作ればいい、というものではない、ということ。文学や美術であれば、芸術家はそれを作り、それを残しておけば、のちの時代に評価されることがあるでしょうが、音楽の場合は、作曲したものを演奏してくれる者や聞いてくれる「受け取り手」の存在が不可欠だということです。

そしてこの「受け取り手」は、時代によって大きく変わっていきます。クラシック音楽の主な舞台となるヨーロッパであれば、教会→王侯貴族→大都市の市民層と、受け取る側の主役は変わり、その移り変わりと音楽は密接な関係にある、ということです。

記録に残っていて、現在もクラシックとして演奏されている古い音楽はグレゴリオ聖歌です。これは６世紀から７世紀にかけてローマ教皇の座に居たグレゴリオ一世の編纂による、という伝承ですが、実際には９世紀以降につくられたものだと見られています。これには楽器の伴奏はなく、またこれは礼拝に来た信徒に聴かせるのではなく、神様にささげる、メロディのついた祈りというのが適切な表現でしょう。中世においては教会が絶対的な権威を持っていて、歌い手も受け取り手の聴衆も、聖職者や修道士たちでした。教会だけの音楽だったと言えるでしょう。

しかし、十字軍の失敗で教会の権威が揺らぎます。またルネッサンス、宗教改革などの出来事を通して教会やヨーロッパ社会をとりまく環境が変わってきます。特に画期的だったのは、ルターによる宗教改革でしょう。それまで、教会の聖歌や礼拝式文は、聖職者にしかわからない、古いラテン語を使っていました。読まれる聖書も、ヒエロニムスがギリシャ語やヘブライ語から訳したラテン語聖書で、最初は民衆にもわかる言葉だったけれど、ローマの人々がイタリア語などを話すようになっても、聖書はずっとラテン語でした。

それをルターが自分の住んでいるドイツの、ドイツ語に訳し、教会での聖歌も、民衆が歌いやすいドイツ語の讃美歌を作曲したのでした。それに呼応して、教会の聖職者だけの音楽から、王侯貴族が世俗の音楽を楽しむようになったが、まだお金と教養のある人たちだけのものだった。ところが、フランス革命など庶民の権力闘争が展開されている時に、作曲家は、受け取り手に合わせるように努力した。

その点、ベートーヴェンは最初から革命の中で育ち、権力者には決して頭を下げないところがあって、それが彼の交響曲などに反映されている、というのです。ベートーヴェンの音楽の特色を、この本の著者、」片山さんは３つあげています。①わかりやすくしようとする。②うるさくしようとする。③新しがる。

ベートーヴェンの交響曲には、名前がよくついていますが、一番代表的なのは５番『運命』。最初の『ジャジャジャジャーン』というのが、何度も繰り返されるので、子どももすぐ覚えてわかりやすい。①

そして、貴族たちが楽しむような室内楽の小規模で静かな音楽とは違い、大都会の民衆が集まるコンサート会場では、大きな音で聴衆を圧倒するということです。これで強い印象を与えます。②

そしてそれは、常に新しい刺激を求めている民衆に、新しいメッセージがないといけません。③

そうした中で、ベートーヴェンの交響曲９番合唱付きは、それまでの伝統を破って、わかりやすく、大勢の人々が簡単に口ずさめるものになっています。

第１楽章から第３楽章までは、テクニックを駆使した上級者向きの音楽が展開していますが、第４楽章に入ると、突然、「おお友よ、この音ではない！」と歌いだして、あの「歓喜の歌」のメロディが始まるのです。

ベートーヴェンは、音楽を一部の特権階級だけのものにせず、市民層全体に音楽を広げた、近代市民という新しい聴衆のニーズに応えたということが、大きい。彼の持つ玄人好みの高度な音楽ということだけでなく、それと共に世のすべての人々に音楽を普及させていったことが大きい。

それは、ルターが聖書を一部の聖職者のものだけにしていたのを自分の国の言語に翻訳し、自分の国の言葉で讃美歌を作った宗教改革の精神を引き継ぐものとなったのです。

イエス様の誕生が、単にクリスチャンとか、一部の裕福な者のためではなく、すべての人のすくいのためであったということを、私たちは聖書の翻訳や、作曲家の作風からも感じ取っていきたいし、私たちの信仰が、すべての人の幸福につながることを目指している、ということを忘れないでいたいと思います。

（今年の降臨節第４主日には、延岡ではクリスマス礼拝をしますが、宮崎では、この説教文で降臨節第４主日の礼拝をします。）